

展望鏡

映画雑感21

柴生田 晴四

(経済倶楽部相談役)

本年2月から7月公開の邦画作品から。

「エゴイスト」は高山真の自伝的小説「エゴイスト」を、「トイレのピエタ」の松永大司監督が映画化。14歳の時に母を亡くした浩輔は、田舎町でゲイである本当の自分を押し殺して思春期を過ごし、現在は東京でファッション誌の編集者として働きつつ自由気ままな生活を送っています。ある日、彼は母を支えながら暮らすパーソナルトレーナーと惹かれ

合うようになります。最近LGBTを取り上げた映画やテーマがとて多くなりましたが、いささか作り手の思い入れの強さに息苦しさをおぼえることもあります。この作品はドラマとしての完成度と主要な登場人物を演じた鈴木亮平、宮沢氷魚、阿川佐和子の三人の好演で気持ちの良い作品になっています。

「怪物」ではこれまで自らのオリジナル脚本で映画を撮り続けてきた是枝裕和監督が、映画の人気脚本家・坂元裕二とタッグを組んで新境地を開きました。今年年3月に他界した作曲家・坂本龍一が音楽を手がけています。大きな湖のある郊外の町の小学校で子供同士の事件がおき、一方が怪我を負います。息子のいじめを疑って学校にねじ込む母親に対し

てひたすら穏便に済ませようとする学校の対応が事を大きくしてしまいます。単純な人情ドラマでも社会派ドラマでもなく、人間と社会の本質に迫る映画でした。中心となる2人の少年を演じる黒川想矢と柗木陽太が自然な演技で映画にリアリティを与えています。

「劇場版TOKYOMERU」走る緊急救命室」。テレビドラマの映画化作品ですが、予想外のロングロングヒットになりました。派手なストーリー展開もさることながら、人な救助にかける主人公の熱量が文句なしにカタルシスを生みだしています。

「銀河鉄道の父」は門井慶喜が直木賞を受賞した同名小説を成島出監督が映画化。岩手県で質屋を営む宮沢政次郎の長男・賢治は家

業を継ぐ立場でありながら、学校卒業後は農業大学への進学や人工宝石の製造、宗教への傾倒と我が道を突き進みます。厳格な父親からいつしか最大の応援団に変身していく父を役所広司が熱演。いささか強引なストーリー展開を無理やり納得させられてしまいました。「はざまに生きる、春」は宮沢氷魚が発達障害を持つ主人公の画家の青年を見事に造形。俳優としての成長を印象づけました。

「渇水」はハードな作風で知られる白石和彌監督が初めてプロデュースを手がけた愛すべき一編です。水道料金を滞納した家の水道を止める仕事をやり切れない思いで続ける若者の鬱屈とささやかな反乱を生田斗真が好演。相棒役の磯村優斗と息がピッタリでした。